

## ヘーゲル哲学における“für uns”について

### ——(1) “für uns”の使用状況と

#### 『精神現象学』におけるその解釈——

船 盛 茂

### はじめに

『精神現象学』がヘーゲル哲学において占める重要性の点から、更にはその緒論(Einleitung)で「意識の経験」、『精神現象学』の叙述の弁証法的方法などが論じられているが故に、『精神現象学』わけてもその内の緒論については、これまで多くの人によりさまざまな角度から研究が進められてきた。そしてそれらの多くの研究の中には、例えばM・ハイデッガーの“Hegels Begriff der Erfahrung”（『ヘーゲルの経験概念』）や、J・P・イポリットの“Genèse et Structure de la Phénoménologie de L'esprit”（『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』）などのように、『精神現象学』わけても緒論における“für uns”（われわれにとって）に注目し、それに論及を加えたものも数多くみられる。<sup>(1)</sup>それは「われわれにとって」が意識の経験の概念に、更には『精神現象学』が「学」(Wissenschaft)として成立するための要件に深く係わっ

ており、ハイデッガーがその役割については、上記の論文の始めの所でその「問いの射程が、いまわれわれがとも推量しえないような次元に及ぶのである<sup>(2)</sup>」と指摘しているように、極めて広範にして重要な役割を担っているが故に当然のことであろう。

しかしわれわれがヘーゲル哲学において「われわれにとって」に注目するとき、その使用は必ずしも『精神現象学』に限られるものではなく、他の多くの彼の著書、講義用草稿の内にそれを確認することができ。これまで「われわれにとって」の研究については、専ら『精神現象学』のそれに限定されてきたわけであり、またそれに加えて同書が「意識の経験の学」としての性格を有するが故に、その解釈にしても「意識の経験」の概念を廻ってなされてきたといっても過言ではなからう。しかし『精神現象学』の独自の性格といったものに着目するとき、「われわれにとって」を単に同書に限定するのではなく、他の著作、講義用草稿におけるそれまで含めて包括的に検討することにより始めて、彼の哲学におけるその意味や役割などについてのより適切な理解へと到

達できると思われる。

この小論においてわれわれは、『精神現象学』における「われわれにとって」についての従来の解釈をもとにしながら、イエーナ時代における若きヘーゲルの各種の断片、講義用草稿で使用されている「われわれにとって」についても検討を加えることによって、ヘーゲル哲学におけるその包括的な説明を試みることにしたい。

〔一〕

ここでまずイエーナ時代のヘーゲルの各著作、講義録・草稿として世に出ているものについて、それらの内で一体どの程度「われわれにとって」が使用されているのかについて見ていくことにしたい。現在刊行中のH・ブーフナーとO・ペッゲラーの共同になるヘーゲル全集で、ここで考察の対象となるのは、第四巻から第九巻であるが、その内の第五巻は現在までのところ入手不可能であるため、それを省いて「われわれにとって」の使用状況を見ていくことにする。

(1)第四巻にはヘーゲルがイエーナへ移った当初の „Differenz des Fichteschen und Schellingschen Systems der Philosophie“、„Kritiken und Anzeigen aus der Erlanger Literatur Zeitung“、そしてヘーゲルが一八〇一年よりシェリングと共同で出版を始め、一八〇三年シェリングがヴェルツブルグに移るまで続いた『哲学批評雑誌』の第一・二巻に掲載の論文が収められている。これらのいくつかの論文について「われわれにとって」の使用状況をみてみると、『哲学批評雑誌』の第一巻中

のシェリング的な絶対的同一性哲学の体系と、そのラインホルトの二元論との関係を論じた „Über das absolute Identitäts-System und sein Verhältniß zu dem neuesten Dualismus“ の最後の部分で一回、同じく第一巻の „Verhältniß des Skeptizismus zur Philosophie“ の一回、第二巻の „Glauben und Wissen“ の一回と、合計三回使用されているのみである。

(2)第六巻には一八〇三／四年のヘーゲルのイエーナ大学冬学期における自然哲学と精神哲学のための講義用手稿の断片が収められている。ここでは「われわれにとって」は、精神哲学の部分で三回使用されているのみである。

(3)第七巻には一八〇四／五年のヘーゲルのイエーナ大学冬学期における講義用完成稿の断片——内容的には論理学、形而上学、自然哲学の三部門から成っている——が収められている。この内ページ数で約三分の一を占める論理学の部分では、「われわれにとって」の使用は一回も認めることができなかった。次の形而上学では、全体の六分の一弱であるにもかかわらず、二六回の使用が認められた。その内でも C. Metaphysik der Subjektivität に、更にその内でも III Der absolute Geist で集中して使用されている点が注目されるべきであろう。そして自然哲学の叙述に最も多くのページが割かれているが、ここでの「われわれにとって」の使用は三五回であり、特にある部分に集中するような使用のされ方は認められない。第七巻全体での使用は合計六〇回が認められ、これは約一年前の第六巻に収められているものでの使用回数と比較して、

相当頻繁な使用であると言えよう。

(4)第八巻には一八〇五―六年のヘーゲルのイエーナ大学冬学期における講義用の実在哲学に關しての手稿が収められている。内容的には自然哲学と精神哲学の二部門から構成されているが、「われわれにとって」の使用状況をみると、初めの自然哲学において五回、精神哲学において五回と合計一〇回使用されている。ここで若干注目されるのは、精神哲学における五回の使用がすべてⅡ Wirtlicher Geist に片寄っている点であるが、使用回数そのものが少ないので、全体としてそれ程問題とするには及ばないであろう。

(5)第九巻には一八〇七年出版の『精神現象学』が収められている。「われわれにとって」の意味などについて多くの研究はこれまで専らこの書を中心となされてきたわけで、そのような点を考慮するとき、この書での使用状況が如何というのは、大いに注目されることである。

この書においては「われわれにとって」は合計四四回、しかも比較的平均して使用されており、それ程の片寄りはみられないが、最初の序論としてⅤ 理性の確信と真理の段階での使用が少ないのが注目されるところであろうが、その内の序論については、その内容更には『精神現象学』全体の中での序論の位置及び役割などから考えて、その使用が少ないのも納得できよう。更に詳細に意識の発展の各段階における意識の展開過程と「われわれにとって」の使用の対応関係をみてみると、確かに意識が新しい形態になった叙述の始めの部分での使用はかなりあるが、<sup>(3)</sup>その回数などから見て、必ずしもそれ程顕著な対応関係があるとは言えない

ように思える。<sup>(4)</sup>

これまでの「われわれにとって」の意味等についての論及が多くの場合専ら『精神現象学』におけるその使用を廻ってなされてきたのは、すでに指摘した如くである。しかし我々がイエーナ時代の『精神現象学』成立までのヘーゲルの各作品ごとにその使用状況を分析し、また全体を概観してみると、「われわれにとって」の使用は必ずしも『精神現象学』に限られるのではなく、というより各作品ごとに見た場合、一八〇四―五年冬学期の講義用完成稿における使用回数の方が相当多くなっているのが注目されよう。勿論「われわれにとって」の意味、重要性更にはその果している役割などについて検討する場合、その使用回数の多少によってただちに各作品における「われわれにとって」の重要性を指摘するのは、早計と言ふべきであろう。というのも「われわれにとって」がヘーゲルがある作品を叙述する際、時によりある必要性からわれわれの立場から叙述を加える、その言わば「断わり書き」と考えた場合、われわれの立場から叙述がなされる、その都度必ずしも「われわれにとって」という「断わり書き」がなされる必要もないとも言えるからである。<sup>(5)</sup>しかしそのような可能性はあるとしても、上に指摘したように、『精神現象学』においてよりも、一八〇四―五年の講義用完成稿において、より多く「われわれにとって」の使用がなされている点、顕著な特徴として注目し、その詳細について論じる必要があるであろう。

また一八〇六年八月六日の友人ニートハンマーへの手紙から、ヘーゲルが同年二月から『精神現象学』の印刷にすでに着手していたことはよ

く知られているが、このことからすると同書の執筆開始はそれより更に早い時期からということになる<sup>(7)</sup>。ところがそれであるにもかかわらず、その『精神現象学』の執筆開始時期とはぼ時を同じくしてなされていた一八〇五―六年の講義用実在哲学のための手稿にあっては、すでに指摘した如く「われわれにとって」の使用が非常に少ない。この点も看過すべきではなからう。

次に収められている論文の性格、成立の事情が全集の各巻ごとに異なっている、それぞれの巻ごとの単純な比較は鎮しむべきであるが、そういう点を一応考慮した上で、各巻の論文のどの部門でどの程度「われわれにとって」が使用されているか、また共通した特徴が認められるか否かについて簡単にみてもいい<sup>(8)</sup>。ただし第四巻については、シェリングと共同で手がけた『Kritisches Journal der Philosophie』などに掲載された小論文を集めたものであるからして、ここでは一応省いて考えざるを得ない。第六巻は自然哲学と精神哲学の二部門より構成されているが、「われわれにとって」の使用は精神哲学の部門の三回のみである。第七巻は論理学、形而上学そして自然哲学の三部門から成っている。第一部の論理学においては、「われわれにとって」の使用を認めることはできない。第二部の形而上学においてはすでに指摘した如く二六回、その内 C: Metaphysik der Subjektivität の III. Der absolute Geist で一五回を数えることができる。自然哲学の部門でも三四回を数えることができた。第八巻は自然哲学と精神哲学の二部門から成っており、「われわれにとって」の使用は各五回ずつ確認できたのみである。

ところでイエーナ時代におけるヘーゲルの哲学体系の生成過程を、彼のイエーナ大学の講義題目から形式論的に検討を加えた中塾氏は、一八〇三―四年の冬学期に至って「論理学および形而上学」が「自然哲学」および「精神哲学」とならんで「思弁哲学体系」の構成部門として明確に定位されたこと、更に一八〇六年に至り形而上学が論理学に吸収されたことを指摘している<sup>(9)</sup>。このような中塾氏の考察は講義題目から体系構想の成立していく過程を見る限り、当を得たものと言えよう。以上のようなイエーナ時代の体系構想を踏まえて、各部門ごとに「われわれにとって」の使用状況を見ると、思弁哲学としての論理学および形而上学——これは実際には一八〇四―五年の講義用完成稿で一回だけ登場——には二六回、自然哲学——全集第六―八巻ですべて登場——には合計三九回、精神哲学——全集第六・八巻の二回登場——では合計八回の使用を認めることができる。このことから部門別に見た場合、思弁哲学と論理学の両部門で相当使用されているのに対し、精神哲学においてはそれ程の使用が認められないと言いうことができるようであるが、しかしそれぞれの部門の登場回数、また各巻での極端な片寄りを考慮するとき、少なくとも現段階では部門ごとの「われわれにとって」の使用の特徴についての言及は控えた方がよいと思われる。また第九巻『精神現象学』についても、その性格や構成からしてここでの各部門ごとの分析対象からは除外した方が適切であろう。

以上主として一八〇三―四年の講義手稿から一八〇七年出版の『精神現象学』までの中で、「われわれにとって」がどのような部門でどの程

度使用されているかを、いくつかの観点から見えてきたわけであるが、これらのことからヘーゲルの哲学において「われわれにとって」の持つ意味や果している役割などについて検討を加え論じる場合、これまで多くの研究者により専ら取り上げられてきた『精神現象学』に加えて、一八〇四～五年の講義用完成稿である『論理学、形而上学、自然哲学』での「われわれにとって」の持つ意味や果している役割についても検討を加えることにより、「われわれにとって」についての新たな見解を得ることができないかと思える。

そこで次にまず『精神現象学』における「われわれにとって」についてのこれまでの解釈を整理し、次いで主として一八〇四～五年の講義用完成稿、わけてもその中の „Metaphysik C. Metaphysik der Subjektivität“ の III. Der absolute Geist のそれを中心にして考察を加えていくことにしたい。

## (二)

『精神現象学』における「われわれにとって」についてのこれまでの多くの解釈について述べる場合、まず第一に取り上げられるべきは、M・ハイデッガーのそれであろう。彼により始めて「われわれにとって」の重要性がその本来的な深い意味において、従ってまたそれを通じて意識の経験の運動の構造や意義などが浮彫にされてきたと言っても過言ではなからう。ハイデッガーが『ヘーゲルの経験概念』において、専ら『精神現象学』の緒論を取り上げ、その委曲を尽くした分析を行っている

のは周知のところである。緒論はその前に置かれた序論が „Das absolute Wissen“ 執筆後一番最後に書かれ、それ故『精神現象学』への序論としてのみならず、目次の所で序論について「学的認識について」という副題が付されていることから明らかなように、『精神現象学』の展開のすべてを俯瞰する視点で、従ってここから新たに見通されたであろう体系の展望をもって書き上げられた、言わばヘーゲルの哲学全体の最も基本的立場の宣言であるのに対し、緒論はこの著作の執筆の最初に書かれたものであり、本論で展開されている意識の経験の世界への文字通り導入 (Einleitung) として、この著作の展開原理である「意識の経験」の基本構造を述べている。それ故ハイデッガーがその研究において緒論を取り上げる場合、それが「意識の経験」の概念へと収斂されるのは当然であり、従ってそこで「われわれにとって」について試みられている解釈も、意識の構造、意識の経験との関連において展開されているのは当然であろう。

ハイデッガーはヘーゲルの考えに即し、「現象する知」に関し、その「うしろには、現象しない知が隠れている」と思いこんだり、あるいは「叙述は真なる知と区別された単に現象するだけの知をまず叙述し、やがて真なる知への道をたどる」などと解釈することを厳しく退け、「現われ出る知の現出」それ自身がすでに「知の真理性」であること、「現われ出る知をその現出において示す叙述は、それ自身学である」ことを強調している。<sup>(1)</sup>

ここで「学」(Wissenschaft) ということに注目してみたい。現象す

る知の叙述がそれ自身すでに「学」であることの根拠は、現象する知が意識の経験に由来するからして、意識の経験の内に求められねばならない。そして「学」であることの根拠が意識の経験そのものの内にあるとしたら、意識の経験はその対象においても、またある一つの対象から次の対象への移行においても、換言すればある一つの意識の形態から他の形態の意識への意識の展開(Entwicklung)においても、そこには経験の主体たる当の意識にとって、如何なる意味においても外的な何物も介入すべきではない。というのも意識の経験の内に現象する知の叙述が「学」であることの根拠が求められるべきであるとすれば、それは厳密な意味において必然性を具備していなければならず、意識の経験が必然的なものであるためには、意識の経験の過程に一切の外的なものが介入してはならないからである。これにより始めて意識の展開が必然的な連関において、従ってまた「意識の諸形態が欠け目なく出そろふ」<sup>(12)</sup>ことになる。

ハイデッガーは意識の経験が必然的なものであることを、ヘーゲルが緒論において意識について述べていることから、次のような三つの命題に注目し、意識の構造的側面から詳細な説明を加えている。

「しかるに意識はそれみずからにとってその概念である」

「意識はその尺度をおのずからにおいて与える」

「意識は自己みずからを吟味する」<sup>(13)</sup>

しかしこの小論におけるわれわれの目的は、ヘーゲルの「われわれにとって」の解釈であり、さし当ってはハイデッガーのその理解である

からして、意識の経験の必然性についてこれ以上彼の解釈を追うことは、ひとまず控えることにしたい。ところで意識の経験が必然的なものであると言われる場合、今上に指摘したこのみでは不十分であろう。意識の経験とその過程が厳密な意味で必然的なものであるためには、今指摘したことに加えて、次のようなことも要求されよう。すなわち意識の経験の進行の目標(Ziel)が、その系列と同じく必然的に設定されており、意識の歩みはその目標への欠け目ない進行でなければならずということである。そのことをヘーゲルは「また進行の目標は、その系列と同じく必然的に知に標知されている」<sup>(14)</sup>と言っている。このような目標とそれへの進行が必然的なものであることの根拠は、前に紹介したハイデッガー指摘の意識の構造についての三命題に求めることができるであろう。

しかしヘーゲルにとり「学」は必然性において展開されるべきであるのは当然であるが、それと同時に「絶対者のみがひとり真理であり、真なるもののみがひとり絶対的」<sup>(15)</sup>であり、また真理が存在する真なる形態は、その学的体系において存し得ないからして、意識の経験による現象する知の叙述がそれ自身たとえ「学」そのものではないとしても、「学」の一部門を構成する限り、それは当然絶対者に本質的に関係するものでなければならぬ。ヘーゲルにとり真の知とは絶対者についての知、すなわち絶対知であるのは当然であるが、しかし彼にとり知は秘教的(esoterisch)なものであつてはならず、公教的(exoterisch)なものではない<sup>(17)</sup>。そのためには一度現象知から出発し、絶対知にまで登るといふ手続きをとるのしなければ、絶対知の学も現実性を欠いた

秘教的なものとなってしまふ。

それでは意識の経験と絶対者の関係は如何に考えられ、それら両者の関連に、この小論のテーマである「われわれにとって」<sup>(17)</sup>はどのように関与していくのであろうか。ハイデッガーは前に指摘した意識の構造に関する三命題の言わば基本命題として、「絶対者はすでに即自かつ対目的にわれわれのもとに存在し、また存在することを意志する」<sup>(18)</sup>を緒論の内<sup>(18)</sup>に認めている。意識の経験と絶対者との関係についてのわれわれの問と、このハイデッガーの指摘との間の関連の手がかりを、われわれは序論における「実体（絶対者）は本質的に主体である」<sup>(19)</sup>というヘーゲルの言明と、『精神現象学』が二重構造的な性格を有していることの内に求めることができる。

ヘーゲルは「学」についての自らの基本的立場を、実体を主体として把握するところにあると宣言する。このことはまたただちに「真なるものであるのは、ただこのように自らを再興する同等、ないしは他的存在のうちにあるながら、自己自身のうちに還帰することのみであって——最初からある根源的な統一そのもの、あるいは直接的な統一そのものではない。真なるものとは、自己自身となる生成であり、自己の終りを自己の目的として予め予定し、前提し、また初めとしてもち、そうしてただ目的を実現して終りに達することによってのみ、現実的であるところの円環」<sup>(20)</sup>であると詳論されている。このように絶対者ないしは実体は、静的な自己同一性ではなく、他者となることにより自己へと還帰する自己定立的な運動として主体的なものであることにより、それはまさしく

精神 (Geist) である。精神とはヘーゲルにとり次のような三つの契機を持つ現実的にして全体的なるものである。すなわち

- ① 実在しないしは即自的に存在するもの
- ② 関係するものであり、限定されたもの、また他的存在であり、対目的に存在するもの
- ③ このように限定されており、自己の外に存在しながらも、自己自身の内に止まるもの<sup>(21)</sup>

というこれら三つの契機から成るものとして、即自かつ対目的に存在するものが精神である。しかし精神的なものがそのようなものであるのは、当初は「即自的に」のことであるにすぎず、いまだ精神の実体にすぎないからして、精神的なものは自ら自覚的に即自かつ対目的であらねばならず、自らが精神であることを知るようにならねばならない。すなわち精神的なものには、自らが前に指摘した三つの契機を備え、それが展開されることにより、自らがそのようなものであることを自覚する——そのためには精神的なものは、自己自らを対象としてたて、それから還帰するという自己生産が必要——そのような内的必然性がそこに働いていると言えよう。ここに精神的なものが自己を展開し、自らを即自かつ対自的に自覚していくための「学」としての「精神の現象の学」が要求される由縁がある。

即自的なものは自らを外化して対目的とならねばならない。このことは「即自的なものが自己意識をもって自らと一なるものとして定立すること」<sup>(22)</sup>に他ならない。このような「学」の成立の境位 (Element) の生

成こそが、「精神の現象の学」が叙述するところのものである。そして精神の直接的な定在は意識に他ならない。それ故精神的なものが直接的なもの、即自的なものから出発し、精神として自らを即自かつ対自的に自覚するに到る道程すなわち「精神の現象の学」は同時に「意識の経験の学」でもあることになる。更にまた絶対者は精神であるからして、精神が自らを即自かつ対自的に自覚し、現実性を獲るに到る過程、それはまた絶対者のそれであり、かつまた今指摘した如く意識が自らにおいて行う経験の過程でもある。このように意識の経験の過程と精神または絶対者の実現の過程とが一つになっていることにより、意識の経験による現象する知の叙述は、意識の経験の「学」であることになる。この意識の経験と絶対者との関係を意識の経験の側から言うならば、意識の経験により始めて絶対者は絶対的なるものとして現実性を獲る、換言すれば「絶対者は絶対的に自己自らのもとに臨現し、本質そのものである」<sup>(23)</sup>ようになる。このような両者の関係を鋭く指摘したのが、ハイデッガーの基本命題、すなわち「絶対者の臨在」(die Parusie des Absoluten)<sup>(24)</sup>ということになる。

「われわれにとって」は、『精神現象学』におけるこのような二重構造と深く係わるものとして理解されるべきであろう。そこで今一度ハイデッガーの解釈を追ってみることにしたい。

彼は意識の構造についての三命題を提示しつつ、それらの命題が、ということとは当の意識が両義的であることを明らかにしている。「意識はそれ自らにとってその概念でありながら、しかもそうではない」、「意

識はその尺度を自らに与えながら、しかもそれを与えない」、「意識は自己自らを意味しながら、しかも意味しない」のであり、それ故「それがまだそれでないところのものであります」という両義性(Zweideutigkeit)<sup>(25)</sup>こそが意識の本質であると言わねばならない。それは換言すると絶対知へと到る経験の過程にある自然的意識にとっては、いまだ自己の経験の何たるか、すなわちそれがどこまでも自己自らにおいてなされる経験であり、それ故に一つの意識の段階から次の新たな段階への移行に必然性が存すること、更にはそのような自己の経験が同時に精神すなわち絶対者が自己自らを展開・実現し、最終的に絶対者が絶対的に自己自らのもとに臨現し、本質そのものであるに到る道程であることは自覚されていない。このような意識の経験の本来的あり方は、当の意識にとってはヘーゲルの言葉を使えば「いわば意識の背後で」(gleichsam hinter seinem Rücken)<sup>(26)</sup>においておこっていることである。このような意識の両義性を結びつけて、意識の経験の過程を学的行程へと高めるのが「われわれ」であり、「われわれのつけ加え」(unsere Zutat)<sup>(27)</sup>である。経験の内にある意識は自らが今まで真(即自存在)と私念していたものが対象自体ではなく、その自分に對する存在あるいは現象にすぎないことを自覚することにより、自分の態度を変えて知を対象に合致させようとする。

このように意識の経験の過程には常に「意識の転回」(eine Umkehrung des Bewußtseins)<sup>(28)</sup>が働いている。そしてこの意識の転回において当の意識に示される事柄は、意識の背後でおこっていることとして、



「意識にとって」(für das Bewußtsein) は、まだ存在せず、「われわれにとって」存在するのである。それ故「われわれ」とは「自然的意識の転回においてこの意識を私の念のままに放任するが、しかし同時にかつ取りたてて、現われ出るものの現出へ見放つもの」<sup>(29)</sup> のことである。してみれば意識の経験の過程は、「われわれのつけ加え」(unserer Zutat) でもある意識の転回によって始めて学的進行へと高められると言えよう。

以上のことを基本命題と結びつけてハイデッガーは、「経験の本質に叙述が属し、この叙述が転回にもとづき、そして転回がわれわれのつけ加えとして絶対者の絶対性へのわれわれの本質的關係の遂行であるとする、われわれの本質そのものが絶対者の臨在に属するのだということになる」<sup>(30)</sup> と結論づけている。それ故「われわれ」とは、意識の経験のただ中において「 $\Gamma$ 」であって、まだない」という意識の両義性を結びつけることによって、意識の経験の過程を「 $\Sigma$ 」へと高める役割を担っていると見えよう。そうであるからこそ意識の経験の過程が完了し、意識の両義性が消失するとき、われわれによるつけ加えも不要となる。しかしまたそのみならず、意識の経験の過程は同時に絶対者 $\equiv$ 精神の現象の過程であるからして、「われわれ」とは意識の経験と共にありながらも同時にそれを越えて、意識の経験の背後における絶対者 $\equiv$ 精神の現象を、というよりも「絶対的他在における純粋な自己同一性」という絶対者のあり方を常に先行的に見ているもの、それは換言すれば「絶対的他在における純粋な自己認識」<sup>(31)</sup> へと到達しているものでもあることになる。

う。そのような意味でハイデッガーは「われわれの本質そのものが絶対者の臨在に属する」と結論づけているのであろう。

以上われわれは『精神現象学』における「われわれにとって」が、ハイデッガーにおいてどのように理解されているかを考察してきた。そこでこのことを踏まえて、他の研究者のそれについてもここで簡単にふれてみたい。イポリットは「われわれ」が絶対知の段階にまで到達している「哲学者」として、経験の過程にあってそれに埋没した意識から区別されておき、そのような哲学者である「われわれ」によって、「意識の進歩の思弁的必然性」が明らかにされていると言っている。<sup>(32)</sup> このようなイポリットの見解は上に見たハイデッガーのそれと基本的には同じと考えてよいであろう。またL・B・プンテルも「われわれ」に関する問が、「精神現象学」の適切な解釈のための基本的問の一つであるとして、その重要性に着目し、「われわれ」が「すでに精神の理念へと押し進んでいってしまっている叙述者であり考察者」、あるいは同様の指摘であるが、「学的立場に關しての現象学的表現」であること、それ故「われわれ」が意識の経験に立ち会い、それを見る——それは「学的な前進としての弁証法的運動の考察」という「われわれのつけ加え」であると言っている。<sup>(33)</sup> それ故プンテルの場合も基本的にはハイデッガーやイポリットの場合同様、「われわれ」が学的立場に達した哲学者であり、意識の経験の運動への「われわれ」の立ち会いにより始めて、意識の経験の運動が学的行程へと高められると考えていると言ったことができよう。またその他茅野良男氏においても「われわれ」がいつでも「事象の歩み」に伴

ない、かつそれを常に全体として「観察するもの」、あるいは「われわれすなわち精神の歩み全体をすでに知っている立場」として同様の見解を認めることができる。<sup>(34)</sup>

これまでわれわれは『精神現象学』における「われわれにとって」がどのように解釈されているかを、ハイデッガーを中心として何人かの研究者の解釈に拠りながら見てきた。次に『精神現象学』成立以前のイエーナ時代におけるそれについて見ていくことにしたい。

註

- (1) 最近のものとしては、Hegel Studien Beiheft 10 “G. L. B. Punt による „Darstellung, Methode und Struktur “や、Hegel Studien Beiheft 11 “G. Kolloquium VI “、Hegel Studien Beiheft 16 “の第三部 “Der Begriff der Negativität in der Phänomenologie des Geistes “などにおいて間接的に論じられている。
- (2) M. Heidegger “Holzwege “ S. 154
- (3) そのような使用箇所を一五認めることができる。
- (4) これまで指摘してきた各巻における使用回数については、数える際若干の見落としもあると思われるので、その旨ここで予め一言断っておきたい。
- (5) これについては最終的にはこの小論全体の結論をまわって始めて明らかにしよう。
- (6) “Briefe von und an Hegel “ I von Hoffmeister S. 113
- (7) “Hegel in Berichten seiner Zeitgenossen “ von G. Nikoln S. 66  
 においてヘーゲルが自分の受講生に『精神現象学』の若干部分をイエーナの書店で入手できるように準備を進めている旨のことを伝えたことが報告されている。
- (8) 各巻の各部門ごとの使用状況は次の如くである。

	spekulative Philosophie Logik Metaphysik	Natur- philosophie des Geistes	Philosophie des Geistes
第六巻 Das System der spekula- tiven Philosophie	0	0	3回
第七巻 Logik, Metaphysik, Naturphilosophie	0	263ページ	61ページ
	123ページ	53ページ	160ページ

第八卷 Naturphilosophie und Philosophie des Geistes		5回	5回
	0	182ページ	103ページ
(使用回数)	26回	39回	8回
合計 (ページ数)	123ページ	605ページ	164ページ

- ⑥ 中林謙 『ヘーゲル哲学の基本構造』 S.330
- ⑦ „Briefe von und an Hegel“ I S.122ff., S.136f. 掲載の二通の手紙の中で、本文の脱稿が一八〇六年一月三日、序論の脱稿が一八〇七年一月十五日のちがいを記している。
- ⑧ M.Heidegger „Holzwege“ S.131f.
- ⑨ ibid. S.143
- ⑩ ibid. S.166
- ⑪ Hegel „Phänomenologie des Geistes“ von Hoffmeister S.69
- ⑫ ibid. S.65
- ⑬ ibid. S.12
- ⑭ ibid. S.16f.
- ⑮ M.Heidegger „Holzwege“ S.188
- ⑯ Hegel „Phänomenologie des Geistes“ S.24 カッコ内は註
- ⑰ ibid.S.20
- ⑱ ibid.S.24(註)
- ⑲ ibid.S.26
- ⑳ M.Heidegger „Holzwege“ S.181
- ㉑ ibid.S.175
- ㉒ ibid.S.167(註)
- ㉓ Hegel „Phänomenologie des Geistes“ S.74
- ㉔ ibid. S.74
- ㉕ ibid. S.74
- ㉖ M.Heidegger „Holzwege“ S.173
- ㉗ ibid. S.176
- ㉘ Hegel „Phänomenologie des Geistes“ S.24
- ㉙ J.P.Hypolite „Genèse et Structure de la Phénoménologie de L'esprit“ 『入市會宏祐上巻S.32'下巻S.378
- ㉚ L.B.Punkel „Darstellung, Methode und Struktur“ (Hegel Studien Beiheft10) S.295f., S.301
- ㉛ 茅野良男 『ヘーゲル観念論の研究』 S.211ff.